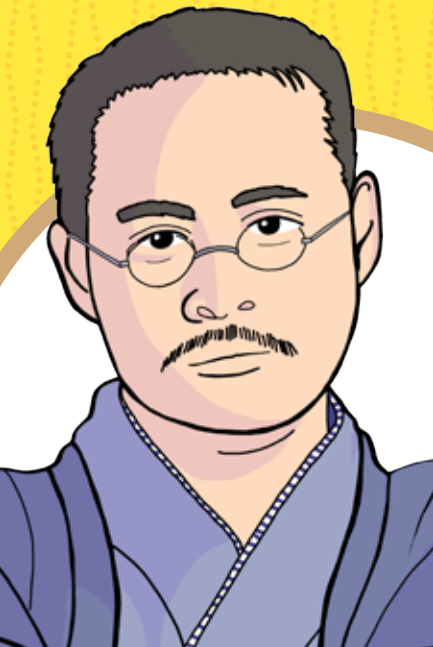


収蔵品展

明治の
文芸雑誌



『新小説』12年9号
明治40(1907)年9月
田山花袋「蒲団」掲載



『文芸倶楽部』2巻5編
明治29(1896)年4月
樋口一葉「たけくらべ」
全文掲載



『明星』辰年9号
明治37(1904)年9月
与謝野晶子「君死にたまふこと勿れ」
掲載



『ホトギス』8巻4号
明治38(1905)年1月
夏目漱石「吾輩は猫である」
初回掲載



あの文豪も新人だったー
明治文学を育んだ雑誌の数々

2024年

4月24日(水)~6月2日(日)

休館日：月曜日(4/29・5/6は除く)、4/30(火)・5/7(火)・5/28(火)

観覧時間：10時~17時30分(観覧受付は17時まで)

観覧料：一般 210円 高校生・学生 100円(中学生以下、障害者手帳をお持ちの方とその介助の方1名は無料)

イラスト：石倉慶子

さいたま文学館では平成9年の開館以来、収蔵資料の充実に努めてきました。その結果、平成9年度末には32,010点であった収蔵資料も令和5年度には19万点を超えるまでに増加しました。

収蔵品展は、こうした資料収集の成果を紹介するために開催しているものですが、今年は当館の収蔵資料の約半数を占める雑誌にスポットを当て、明治時代の文芸雑誌をテーマとして取り上げました。明治時代は、文明開化の名の下に西洋から流入した新しい文学の様式を吸収し、この国に根付かせようとした試行錯誤の時代でもありました。今回の収蔵品展では、そうした明治の文豪たちの活躍を支えた、さまざまな文芸雑誌を紹介します。また、併せて関連する文豪たちの書も展示します。

主な文豪と明治の文芸雑誌

イラスト：石倉慶子



坪内逍遙 安政6年～昭和10年 (1859～1935)

『小説神髓』を著して日本近代文学の成立に大きな影響を与えた。写実主義を唱え『早稲田文学』を創刊した。



森鷗外 文久2年～大正11年 (1862～1922)

『舞姫』などの名作を手がけるとともに雑誌『しがらみ草紙』『めざまし草』を創刊して活発な評論活動を展開。



尾崎紅葉 慶応3年～明治36年 (1868～1903)

山田美妙らと硯友社を設立し、その機関誌『我楽多文庫』を刊行した。幸田露伴と共に『紅露時代』を築く。 ※誕生日は1868年



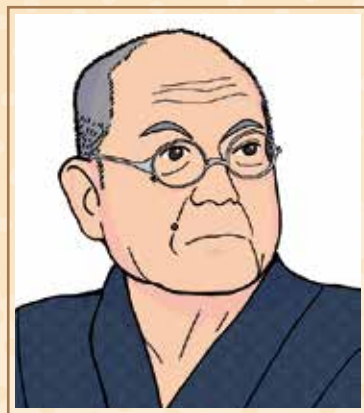
国木田独歩 明治4年～明治41年 (1871～1908)

浪漫主義から自然主義に転じ、作家として活躍する一方で編集者として『近事画報』『新古文林』などを創刊。



永井荷風 明治12年～昭和34年 (1879～1959)

当初は自然主義に近かったが、米仏遊学後は耽美派に。明治43年に慶應義塾大学で『三田文学』を創刊。



武者小路実篤 明治18年～昭和51年 (1885～1976)

明治43年に志賀直哉・有島武郎らとともに雑誌『白樺』を創刊。白樺派や『新しき村』の精神的支柱となる。

関連事業

記念講演会「明治時代の印刷と出版事情」

参加費
無料

5月11日(土)

14:00～15:30(開場は13:30を予定)

講師 山口 美佐子氏(印刷博物館学芸員)

会場 当館1階 文学ホール

参加ご希望の方は **電話(048-789-1515)にてお申し込みください(先着200名まで)**

雑誌は新聞と共に明治のニューメディアです。時に情報源として、時に趣味や娯楽として、多くの人の手に渡り、多大な影響を与えてきました。雑誌が生まれた当時の社会や印刷技術、出版事情について紹介します。

